

『有明の別れ』小考―年中行事・臨時行事の特異な描き方から―

A Consideration on *Ariakenowakare*:

From a Peculiar Description of Annual and Temporal Events

加藤静子 荒 文恵

Shizuko KATO & Fumie ARA

—

『有明の別れ』という作品は、関白家に生まれた一人の女性が、家の存続のために神の啓示をえて男装し、二つの性を生きること余儀なくされた物語である。世間には男女二人のきょうだいがいると信じさせていた。この女性が物語の「女君」で、まずは社会に男性として交わり、大納言「右大将」にまでいたる。無事に家の後継者が誕生して後、帝に同性愛を仕掛けられ、女性とわかつて契られて、男性の身に別れることを心に決める。そして、「右大将」は逝去したと世間には披露される。その後、今度は妹として、右大将時代に仕え契られた帝に入内する。寵愛なみなみならず、あいついで男子を出産し、天皇・東宮の母になり、摂関家及び天皇家の継続のために、男性としてまた女性として生きること寄与した物語と言

えよう。その一人二役については秘せられ、両親などわずかの人が知るのみであった。

摂関家としての後継者は、「夢の告げ」を信じ行動して見出した。右大将としての男性時代に、「隠れ蓑」の術を使って、女性たちを垣間見続け、妊娠した女性を自分の妻として自邸に連れ出し、無事に男子が誕生したことで安泰となる。その妻となった女性とは、「左大将」（女君の、父方の叔父）と再婚した母にともなわれて暮らすうちに、継父に犯され、それが母に知られるという窮地に立った女性で、そこから救い出すかたちであった。すでに身ごもっていた彼女は男子を出産する。出産月をごまかして、女君つまり「右大将」の息子として社会的に披露される。彼女は「対の上」と呼称されるが、押しもおされぬ右大将の正妻である。後に、対の上は、今度は左大将の息子に犯され、女子を生む（表向きは亡き右大将の子として）。二人の子

供は右大将の親戚筋の血が流れているが、関白の孫、右大将の子として生き、かたや左大臣かたや中宮として、摂関家の一員としてその家を支えていくことになる。右大将としての夫婦時代も仲むつまじく、後に女御となつて里下がりした時には、夫が亡くなったと思ひ出家していた対の上に、自分の秘密を明かすが、かつての夫が女性と知つても、二人の関係は夫婦の時以上に親密な関係性を築いている¹⁾。

物語は、「女君」である右大将が男性として活躍する時代、右大将の忘れ形見である摂関家の後継者「左大臣」が活躍する時代と、ふたつの世代が描かれる。「女君」の、果たせなかつた男としての性の面を生きるのが巻二以降の「左大臣」で、そして女君の男性としての類まれな資質を受け継ぐのが「春宮」である。後者が物語において認知されると、物語は終焉を迎えていく。

物語内容を見ると、性の取り替えから、女君の男性としての理想性、暮らしぶり等々、人物の設定、場面性、登場人物の役どころなどまで、『とりかへばや物語』を踏襲している²⁾。しかしながら、『とりかへばや物語』では女君の男としての人生は、取り替えの後には男君に塗り替えられているが、『有明の別れ』の場合、一人の人物の中で行われて、女性になつても男性時代を抱え込んでいる。その点が物語の深さと興行きに大きく左右しているように思われる。閉鎖的な生き方を余儀なくされた女性たちの、もう一つの性を生きること、つまり、能力を十分に發揮できる自由で晴れがましい生き方への願望が読みとれるところは、現代人が読んで、切実感をともない共感できる。

また、表現された世界は、『源氏物語』『紫式部日記』『狭衣物語』『栄花物語』などの平安作品を縦横に引用摂取³⁾し、引歌表現も駆使

されて、内面性もよく描きこまれて、まさしく貴族文学らしいものである。このような物語を生み出す時代的特性は理解できるものの、作者の〈場〉はどんなところにあったのだろうか。

物語評論書『無名草子』に、「むげにこのごろ出で来たるもの、あまた」として、隆信作の『うきなみ』、定家作の『松浦の宮』とともに、『有明の別れ』の名があがって、『無名草子』(一二〇一年頃に成立)にごく近い頃の作品である。『有明の別れ』の成立期を、文治・建久の頃と狭めたのは、金光桂子氏である⁴⁾。

金光氏は、『有明の別れ』の作中歌が、従来いわれていたような定家との親近性を認め、中でも文治・建久期の和歌の影響が見られ、定家もその一員であつた九条家歌壇の雰囲気を反映していると思われることから、九条家周辺に成立の場を認めることができるのではないかと結論されている。さらに、『文治女御入内屏風和歌』(任子の入内は文治六年(一一九〇)正月)では、年中行事題の占める比率が高く、そこには、公事を重んじその復興に力をそそいだ兼実の理念が反映されているという谷知子氏の論を紹介する。金光氏は、年中行事への関心のみならず、『有明の別れ』の入内と、兼実の悲願であつた娘任子の入内は、関連されているとも指摘された。また、特色ある歌語には、俊成・定家という御子左家のみならず、慈円が愛用し、慈円を象徴するような語が散らばり、良経なども含めた、九条家周辺との密接な関わりがあると指摘する。

『有明の別れ』の中で、言及される年中行事について見ると、巻一に集中している。中にはすでに廃絶した年中行事についても触れている点は、指摘がなされている。数の多さもさることながら、加えて、この物語における特異な描き方を問題にすべきと思われる。

本稿では、この物語において年中行事や臨時行事が先行作品の影響を受けつつも、独自で特異な視線からの表現がなされていることを指摘し、その行事が記される意義と、特異な描き方がどのあたりから起因したのかについて考察するものである。

二

女君が、いよいよ「右大将」時代に別れを告げるべき時がきたると、それをいとおしむかのように、年中行事が丁寧な描かれるようになる。

すでに物語第二年において、十月撰関家念願の男子が誕生、閏十二月まで待つて右大将の子として披露されている。

物語第三年に入ると、女右大将は、今年が最後かと出家を思う。そして、それまでになかった年中行事が次々と描かれる。まず最初が「臨時客」である。

A 一日の拝礼、二日の臨時客、常の作法なれど、みがきたてられたるに、西の対の御前の紅梅ひとつ、にほひかほりみちたる御簾のうちを、なほ例の年よりも光まさりて見ゆるを、見いだしたる*侍従らおき所なき。右の大臣も、おとろふばかりの御よはひならねば、いみじくきよげにて、あらはに皇子たちと見えたまへり。民部卿ときこゆるいみじう古人は、かしらの雪もところせくつもりにける年のほごしるきに、たちつづきたまへる左大将の、うちうちこそすくよかにも見えたまひしか、ひろき庭の玉のごとみがきたてられたるには、用意ことにめでたくぞ見なされたまふほど、きらきらしき御隨身のこゑも、なほくちをしからずぞ見なさるる。

右大将は、上臈の納言おほくものしたまへば、あまたのぼりたまひぬるのち、たちいでたまへる御さま、かたち、くまなき春の日かげに、あまりゆゆしきまで見えたまふを、殿のうちの人は、まして涙おとすべし。……

御あそびはじまりて、御琴どもめす。右の大臣、**安名尊**といだしたまへる御こゑ、つきせすめでたし。

(一〇四頁)／＼(三三〇頁)

一日の拝礼、二日の臨時客と、関白家の行事を写し出す。正月の大臣大饗が太政官を招くのに対して、臨時客は、公卿や殿上人たちをもてなす行事である。後一条天皇の寛仁年間以降、撰関家のみが行うようになり、正月大饗に準じて、拝礼・宴・賜祿の三つからなるのを原則とする⁷⁾。堀河天皇の頃までは、対の屋が用いられていた。

ところで、臨時客という儀礼は、先行物語では行事に言及しても、正面から描くことはまずない。数少ない例が『源氏物語』初巻で、次のように記されている。

A 今日、臨時客のことにまぎらはしてぞ、おもがくしたまふ。上達部、親王たちなど、例の、残るなく参りたまへり。御遊びありて、引出物、祿など、二なし。……花の香さそふ夕風、のどかにうち吹きたるに、御前の梅やうやうひもときて、あれは誰時なるに、ものの調べどもおもしろく、**この殿**うち出でたる拍子、いとほやかなり。大臣も時々声うち添へたまへるさき草の末つかた、いとなつかしうめでたく聞こゆ。

(新潮日本古典集成『源氏物語』四、一九頁)

『源氏物語』では、臨時客に上達部・親王たちが六条院に参集し、

管絃の遊びがあり、終わって解散するときの引出物・祿、とまずこの行事全体について言及した。省略したが、六条院の花と女性に心あぐられる若人の心懸想を言い、あとは音楽の素晴らしさ、「この殿」と催馬樂が歌われ、唱和する光源氏の魅力的な美声をいい、御前の梅を描く他は、もっぱら聴覚による表現である。

ところが、『有明の別れ』の臨時客の場合、西の対に住んでいる対の上付きの女房「侍従」らから眺めた光景である。臨時客は対の屋を用いるのが一般的であったが、鳥羽天皇の時代には、忠実が対の屋でも寝殿でも行っている。アでは、西の対から見ているので、寝殿で行われている。前述したように金光氏は本物語と九条家との関係性を指摘されたが、その兼実の実際例を見ると、臨時客は二回ともに寝殿を用いている。物語は近例によった表現なのである。

現実に行われた臨時客を見ると、注8に引用した『中右記』にあるように、参加する人たちは主客が揃ったところで、庭に列立、主人も階下を下りて出迎える。主客から身分の高い順に、一人ずつ南の階をあがって席に着く。そしてある身分から下は、東の階や中門廊から入り、座に着くことになる。

その光景を『有明の別れ』では、*印あたりに脱文あるかと指摘されるところであるが、傍線を付したように描く。寝殿の南庭に列立し、拝礼してから、寝殿の階を上る光景が、主賓であろう「右大臣」を最初に記し、次いで「民部卿」（大納言兼任の民部卿。孤本である底本の天理大学蔵本には「しきふきやう」となっているが、ここに式部卿宮が入るのはおかしいし、「宮」もないので、「式」は「民」の誤写と考え校訂した）、そして「左大将」（大納言）、上臈の

大中納言と続き、主人公の女「右大将」（権中納言）が、美々しい姿で登場する（父の臨時客に公卿・大臣の子が列立する実際例はよく見られる）。官位が上の人物は女大将よりも年上で年配の者も多から、なおさら若く美しいその容姿が際立つさまを描いている。こうして、右大将の素晴らしさを大臣公卿と相対化しながら写し出す姿勢が顕著なのであるが、寝殿に入る直前に焦点をあてるのが、他の物語と異質である。

右の引用部分に続いては、席の第一人の右大臣が「安名尊」を歌ったとされるのも、実際例による。女君も男性として生きるこの終りを意識して、横笛を吹きたてると、天上ではそれと呼応するかのように、晴れた空が俄にかきくもり、稲妻が光とどろき、香ばしい香りが吹き出してくるといふ、奇瑞がおこる場面である。

続いては、「今年は、とりわきつつしみたまふべき年」（女の厄年十九歳か）として、「**節会・除目**」などに、人目おどろかしたまひつつ」と導かれて、二月御前の梅をめでて、詩を作り、管絃の遊びが催される。いわゆる「**梅花の宴**」である。ここでも、男性のものである漢詩を作っては、「この道にふりたる博士どもなど」を感動させ涙をどどめなく流させることになる。『源氏物語』花の宴巻の光源氏像を掠めている。そして、帝に強いられても、横笛は辞退し、笙の笛を吹きますと、再び奇瑞がおこる。物語末尾に呼応する奇瑞であり、それを描く意味では、重要な場面である。帝はここで右大将に権大納言を贈ることになる。

漢詩を作る「花の宴」という場の設定、「**笛**」や「**笙**」の演奏という男性にしか許されないとこで、奇瑞がおこる点に注目すべきであろう。

五月雨のころになる。女右大将の留守に對の上は、今度は左大将の子三位中将に犯され再び懷妊。女右大将は妻を許すが、自分は山の奥で修行をと分離を思う。よつて、「相撲の節、還饗などいふにも、世の常の作法にことをそへて、御よそひ、御車まで、世の中に見えぬきよらをつくして」、御隨身まで美しく飾りたて、今生の別れを告げる準備となる。「相撲」は大將管轄の行事であるが、鳥羽天皇の御代に三度、後白河天皇の保元三年（一一五九）に一時再興されたが、高倉天皇の承安四年（一一七四）をもつて廢絶されたと、注が加わるように、この物語の頃は毎年行われてはいない。作者は女性であるが、よく行事に通じている。

八月二日「臨時宴」（底本「臨時客」を意味により校訂した）。ここの詩作も人を驚かせる。八月十五日に「月の宴」が行われ、翌日帝に召された大將は、帝に戯れかかられ、途中で女性であると見破られて、契られる。

その後病がちに過ごす女大將は、参内を避けるものの、「いま一度人の目おどろかさん」と、九月の「賀茂行幸」に供奉することを決意する。男装の麗姿を今生に刻みつける意味がある。

当日健康がすぐれないことを理由に、準備が整つてから参上する旨、帝の召しに對して奏上する。帝は女大將を待つ。

B：南殿に出でさせたまひて、よろづのことは御目にもとまらず、ただいっしかと待たせたまふもしく、いとかなやかなる前驅の声、いきほひことにいつかれ出でたまへる御様、言へばさらなりや。

御階の右にたちわたりたまふほど、こがらしのさと吹き出でたるも、をり知り顔なるに、桜の紅葉のほろほろとかごとがま

しく落つるかけをぞ分け出でたまふ。菊の上の袴、紅葉の下襲、少し吹きかへされたる裾のほどまで、たをたをとあてにまめかしきものから、あたりもにほふ心地する御かたち、つねよりもけに、ただいまぞひかると見えたまふ。……御さまを、まして目もかれずまもらせたまふ人の御目には、とりあへぬ御涙ぞつづきこぼれぬる。……御隨身のもてあつかふ御下襲の風にひらめくにつけても、上の御胸はそぞろにつぶつぶとなる御心地ぞすめる。

ひまなくたてかさねたる車の前わたり、棧敷のなかごと、下の心をまどはずたぐひ多かるこそをこがましけれ、さるは、……まして、時のまもとかや、うつたへきこえし心には、をりしもあれいみじかりし御心地のほどを、わが身ひとつのうれへ顔に思ひしをれつるを、かく参りたまふよし聞くに、いみじううれしうて、まどひいでたるものは、かけてだに知りたまはじかしと思ふより、檜の隈川のわりなさに、心をくだく車の前にしも、御隨身のいひしらぬ黒駒の空を飛ぶ心地して、人のしわざとも見えず、かけるやうにはしりめぐるほど、いとじづかにおしどめたまへるに、……さりげなくのどやかなる御しりめのほど、あまりまばゆき日かげに、「扇をさしかくしたまへる御手つきなど、ただ「いかにせんいかにせん」とぞ思ひ（底本「思し」を校訂）まどはるる。

左大将の、遠白くながやかならぬ顔つきにさしならびて、御隨身の袴の色まではなばなときはやかなるに、……

先行物語に重なる箇所があると思えば、大きく離れる箇所があ

（一六四頁／三四八頁）

り、離れの大きいのが、いわゆる行事を写した箇所である。先行物語に類似する箇所には波線を、離れる箇所には傍線を付した。以下の引用文においても同様とする。

まず、波線部「檜の隈川のわりなさ」の箇所を取り上げる。行幸で大路を進む場面である。「時のまもとかや」から、見物人の中でも、以前右大将と交渉があり、この物語の最後にも登場する承香殿の女の気持が描かれた箇所である。女右大将を一目みたいと見物にやつて来たもので、『古今和歌集』神遊びの歌「ささの隈檜の隈川に駒とめてしばし水かへ影をだに見む」を踏まえるが、さらに、『源氏物語』の引用でもある。葵巻、光源氏の賀茂御禊の供奉を見に来たものの、正妻葵の上方に、見物の車を破損させられ遠くやられた六条御息所について、「ものも見で帰らむとしたまへど、通り出でむ隙もなきに、『事なりぬ』と言へば、さすがにつらき人の御前わたりの待たるるも、心弱しや。笹の隈にだにあらねばにや、つれなく過ぎたまふにつけても、なかなか御心づくしなり」と描いた場面からの引用である。両物語のどちらの女性も、想う相手（女大将、光源氏）に気づいてもらえず、陰からそつとその姿を見るのである。しかしながら表現としては、次の『とりかへばや物語』の中院の行幸にも見える。後に再度検討したい箇所なので長文を引用する。

イその年の五節に、中院の行幸ありければ、みな人々小忌にて参る中に、宰相中将、権中納言の青摺、いとみじう見ゆ。宰相はいとそそろかにををしくあざやかなるさまして、なまめかしうよしあり色めきたる気色、いとをかしう見ゆ。中納言は、はなばなと見れども見れども飽くまじう、にははしくこぼるばか

りの愛敬似るものなきに、もてなし有様も、さは言へどなごやかにたをたをといとなつかしきほどの、人にこよなくすぐれて目もあやなるを、御方々の人々をかしと見るに、宮の宰相は、いささかも人のけはひする所はただにも過ぎず、必ず立ちどまりものなど言ふを、中納言は見る目に違ひて、宰相の行きもやらず滞りがちなるを後目に見おこせつつ過ぎぬるを、檜隈川ならば、「しばし水かへ」ともうち出でつべく、みな見送らるる中にも、染みていみじと思ふ人ありけり。御隨身のたち遅れて参れる、申すべきことあり顔に気色ばみて候へば、「何事ぞ」と問はせたまへば、「麗景殿の細殿の一口にうち招きとどめて、『参らせよ』とはべりつる」とて、いみじう艶なる文取り出でたり。

（新編日本古典文学大系『住吉物語 とりかへばや物語』

一九七頁）

中院の行幸に小忌衣を着して参上した、宰相中将と女君（権中納言）とに焦点があてられ、前者が女性の気配のする所に必ず立ち止まるのに対して、権中納言は女性達の熱い視線にもかかわらず、まったく関心を示さない、その中に、「染みていみじと思ふ人」とあるのが麗景殿の女で、「檜隈川」の歌の引用で、少しでも目の前に立ち止まってくれることを願う。『有明の別れ』における承香殿の女と物語の役回りが重なっている人物である。

こうして見比べてみると、『有明の別れ』の賀茂行幸の場面は、『源氏物語』の葵巻の光源氏、『とりかへばや物語』の中院行幸に参上した権中納言、それぞれを一目みたいと思う女性の思いを重ねて描いたように思える。『とりかへばや物語』とは、さらに波線部の

ように、男装した女君を形容する「たをたと」「にほふ／＼にほはしく」も重なる。

次に、Bの傍線部である特異な描写について検討したい。最初の傍線部分は、内裏における行幸の一隊が出発前の場面で、行幸における女大将の動きを表している。紫宸殿の南庭にやって来た女右大将の様子、帝の視線によりたどられる。文中、「桜の紅葉のほろほろとかごとがましく落つるかげをぞ分け出でたまふ」の桜は左近の桜であり、どうして右大将が左にいるのか、それを解読するのに、『西宮記』（神道大系）「臨時六」の「左右大将事」を参照した。「④行幸警蹕事」条に見えるもので、次のようにある。

ウ 宸儀御輿未_レ居間、稱_レ左右大将先立_三南階異_二許丈_一。《右大将通_二階下_一立_三西方_一》次王卿列立。《

内は割注。割注内の注は《》で示した。

ウは、警蹕をいつ称えるかという説明の中で、帝の乗る御輿が庭に入ってくる前に、左右大将はまず南の階の「巽」つまり、南東部に立ち、その後右大将は階下を通って西（天皇から見て右）右近の橘側）へ向かうことになっている。この故実のあり方から、物語が記したのは、当初、右大将は左近の桜側（東側）に立っていたのが、右（西側）に移動したという、行幸の次第の一コマとわかる。実際にも確認でき、例えば、『玉葉』文治六年正月二十七日条を見ると、朝覲行幸の出立の際に、列立の後に右大将は同様に移動している。

かすかな動きとも言える「御階の右にたちわたりたまふほど」という記述は、この文を書いた人物が、行幸という儀式における右大将の動きを正確に把握していることを示す。階下を横切る際に木枯らしが吹き、左近の桜の紅葉を散らすその中を分けて、女大将が西

側に歩むという非常に美しい場面であるのと同時に、女大将が儀式の手順通りに動いていることを表すものでもある。そのような視点を導入したのは、帝からの視線を描きたかったからである。右大将を女性として意識し、男性装束である「表袴_{（えのはかま）}」や「下襲」に言及しつつ、その下襲を「少し吹きかへされたる裾のほどまで、たをたとあてになまめかしきものから」とは、右大将を女性として意識した帝の視線を読むべきであろう。

行幸の折に帝とほぼ同じ視線で、南庭を動く右大将を見る女性となると、『年中行事絵巻』の朝覲行幸に描きこまれた劍璽を持つ内侍（掌侍）たちの視線に似ることに注意したい。このような視線は、他の物語では確認できない。

ところで、Bの傍線部、右大将が女大将と「さしならびて」いるという、これも儀式の作法に則していると思われる箇所だが、ここでは、無骨な左大将の様と比較する形で女大将の容姿が讃えられている。宮中から公道に出て、貴族たちのみならず一般庶民にまでその姿を目に焼き付けようとするがごとく、女大将の美しい様子を描写して行幸の場面は終了する。

以上、賀茂行幸において留意すべき点は、主人公の麗姿を最大限に引き立たせる場面が作り出されているが、右大将の動きを実際見ているだけでは書けないような故実ののつとつたように描いている点、先行作品に見られない特性と言えよう。

三

大将として華やかに振る舞えるのも「かぎりに思ひなられ」て、九月の賀茂行幸にのぞんだ女右大将であるが、帝の視線を浴びる気

恥ずかしさもあり、行幸の供奉を途中で辞して帰った。これが大将の、今生最後の姿であった。

両親に苦しい胸のうちを訴え、その結果、翌十月に女右大将死去のことが公表されることになる。

そして女性に戻った女右大将であるが、翌年(物語第四年)二月、もう一つの姿である姫君として入内する。しかし、女御として生きながら、「いまさらにあらぬ世にむまれ来たらん心地のみして、をりふしの儀式、人のたちゐにつけては、あはれにこひしく思ひ出でられたまふ」時が多かったと、現実の女性の身に違和感をおぼえている。そして懐妊、里下がりとなる。里では大将時代に読んだ書籍、公事をつけた日記、ありし調度の中にある奇瑞を起こした笛、かつての男としての品々にふれながら、二度と帰れぬ世界に涙している。この里邸滞在中に、年中行事的描写がまた始まる。それは、現在の女として生きる場と、過去の男としての大将時代を懐かしむ、対比的表現から描かれている。

まず、「初雪御覧」。

C初雪のあした、かやうなりし時もいと軽らかにならひたまへるままに、御前の木立、池のみぎはばかりを少しぬざり出でて御覧じわたすに、親しく仕うまつりし御随身の男どもなど、「かなし、いみじ」とのみ思ひしをわたるを、今朝はわきて昔の思ひ出でられければ、…いといたくくづはれたるけしきにて、はるかなる中門のかげにさぶらふが…

(一九四頁／三五七頁)

当時、初雪の日に天皇や摂関家でそれらを賞美したことは、よく知られている。そういうときに自分によく従ってくれた随身の男たち

も、主人を亡くしてしよげた様子で中門に控えている。それを目にして、自分が男性であった時は、美しい雪気色を求めて、野辺にまで自由に外出もできたが、今は同じ家ながらわずかに室内から、庭の木立や池のあたりを眺めるのみ、昔が恋しいと、二首の独詠歌が置かれた。

これも引用を省略したが、そこに中将が勅使として遣わされた。女君は、彼を「昔によそへて」昔の自分になぞらえ眺める。帝は、清涼殿東庭の竹を雪を置いたまま手折つて文をよこしたのであるが、この勅使を饗応するとき、主人の父大臣をはじめとして、接待側でも右大将の不在が痛感され、悲しみがおそう。

初雪御覧という一コマによせて、故右大将への思いが、女君自身、隨身、父大臣、そして家中の人にと、偲ぶ人の粹が拡がっている。続く「五節」の頃として次のように記す。

D五節のほどは、世の中いとはなやかなり。寅の日は上人ひきつれて参れる、何の異なることなきも、おのがさまご思ふことなげなるぞ、例のわかず御覧じわたさるる。左大将、左衛門督など、土器とりて人々もてはやしたまふ。ただ、朝夕の御身の上を、はるかに見いだしたまへるも、もの心細きからは、ずるに御涙こぼるべし。

ひととせの豊の明りぞかし、小忌の装束にてめづらしかりし御よそひもてはやされたりしは。我が御身ながら、または見えるまじきぞあはれなるや。

もろ人のかさず日蔭をよそに見てなほ忘れぬ山藍の袖
局々の童女ども、おのがじしつくるひたてたるも、例のひと
ところは映えなくのみ御覧ぜらるれば、皆たてまつらせたまへ

り。西の中門、対、渡殿を通りて、夢のやうにもこよひ参るけしきども、いみじうつしましげなるに、もてかしづきひきつくるふ人の、誇りかに思ふことなげなるは、げにもの好もしげなるを、さし並べて見るに、こよなく罪重くぞ御覽じうとまるる。

中院の行幸のほど、げに御覽じなれにしかたは、ふと御胸ふたがりて、帰らせたまふほどはいみじく更けぬれど、

光なき階のみぎりのさびしさに

見し夜の月をまつしのぶかな

せちに小さく結びこめさせたまへるを、ひきあけてぞ、少し御顔の色うつろひぬる。

月かげのいる山のははすみうくて

なれしみぎはを恋ひぬままでなき

(一九八頁／三五九頁)

まず、「寅の日」に女御の里に殿上人が大勢集まる。これは「淵酔」を記したもの。その時に里で接待する身内の男性を見ても、女君は、「すずろに御涙こぼるべし」と、昔が恋しい。

「ひととせの豊の明り」とは、「小忌の装束」から卯の日のことを指す。「豊の明り」を辞書類や『歌ことば歌枕大辞典』などにあると、新嘗会の最後の日、「辰の日」の豊明節会をいうとあるが、實際例を新編国歌大観で検索すると、これは「辰の日」とは限らないのである。

続いて、内裏から一人見るのもと、女御の里邸に童女たちが遣わされ、中門、対、渡殿を通じてやって来る、付き人たちの女性達にも目がいく。これは天皇が、清涼殿の孫廂に童女を二人ずつ、庭に

下仕四人ずつを召して見る、いわゆる「童女御覽」の日のことであり、「卯の日」に催す。

次の「中院行幸」が、後述するように「卯の日」にあり、「ひととせの…」からすべて卯の日に関わることである。

このあたりは『紫式部日記』の影響があると指摘されている。『日記』では中宮彰子が内裏滞在中のことで、その折には、殿上人の中宮方淵酔も、また童女御覽も自然である。『有明の別れ』においては、懐妊して里にいるときなのであるが、実際に「女御」のもとに、殿上人がやってくる「淵酔」や「童女御覽」があったのであろうか。

『玉葉』建久二年(一一九二)十一月二十一日条によれば、中宮任子が気分すぐれず里方に滞在していた時に、公卿参人の淵酔があったらしい。兼実は先例を尋ねて、母后が里にいる時はこういう事例が多かったが、妻后では、上東門院彰子が懐妊して里第にいた時の例、後一条院中宮威子や後朱雀院中宮姫子の例があったと、道長・頼通という摂関期全盛時代の先例を引き、任子に申し行わしめている。また、『大日本史料』所引『三長記』の建久七年(一一九六)十一月十六日条によれば、公卿・殿上人の淵酔が「宣陽門院、一品宮、七条院」の三箇所で行われたとあり、母后七条院以外の邸宅でも行われていて、関白邸にいる寵愛の女御方で行われたとしても問題はなさそうである。

卯の日の童女御覽の後に、内裏から離れた女御の邸に童女を赴かせる例も管見には入らなかった。ただし、白河上皇が、所望して内大臣忠通の童女と傳とを御覽になり、その帰途、父の関白忠実邸に立ち寄らせ女房たちが見物したとあるので(『殿曆』永久三年十一

月十四日)、あり得ないことではない。『有明の別』の作りごとではなさそうである。

次の「中院の行幸」は、あまり記録類には記されない。中院とは中和院、別名、神嘉殿とも言う。神今食および新嘗祭の十一月中卯の日に、ここで天皇は神事を行う。新嘗祭は、その秋に収穫した初穂を神に奉り、その後天皇が食するという、夜中の神事であり、関係する人物は限られる。

そこには、帝の行動にそつた思いが記されているが、それを読み解くために必要な故実を、神道大系『江家次第』『新嘗祭中院儀』を中心に見ていきたい。

当日以前に参加する人を卜定により決め、当日朝早くに供奉の内侍・女蔵人が卜定で決められ、また、選ばれた殿上侍臣や弁少納言以下に小忌衣が配られ、日蔭簷が用意される。「小忌の装束にためづらかりし御よそひ」とあるのは、卯の日の朝に配られたもので、「ひととせの豊の明り…」から、卯の日に移ったと読むことに支障はない。

その後を、『江家次第』から次に抜粋する。念のために、物語より時代が下る『京都東山御文庫 建武年中行事』(国書刊行会 二〇〇〇年)もあわせ見た。なお、…は省略、へは割注、()内は稿者の要約を記したもの。

工戌一点天皇御_三南殿_一…近衛次将等向_二日華門_一…内侍持_三璽_一・劍等_一立_三左右_一、小忌王卿列_三庭東辺_一倚_三御輿_一、へ左近立_三右方_一、右近立_三左方_一、公卿中将若大将為_三小忌_一者、離_三別副_一御輿_一へ…内侍進_三御劍_一、乗御、へ諸衛不_レ称_三警蹕_一へ内侍進_三御璽_一、…(御輿が進み、神嘉殿に着く)…倚_三御輿於_三神嘉殿

南階_一、へ…近代御輿居_三於階前地_一下御、此間左近陣_レ右、右近陣_レ左…宸儀降_レ輿、入_レ自_三南廂西戸_一、…小忌王卿著_三西屋座_一、…(天の羽衣を供し、御湯殿のことあり。内侍が縫司を率いて寝具を神座上に供し退出)

亥一剋采女付_三内侍_一申_三侍_一(時イ)至_一、縫司供_三神事御服_一、御手水_一、宸儀開_三中戸_一入_三東御方_一…(戸内の事は摂政は見るが関白は見ない)…事畢宸儀還_三御所_一、内侍撤_三寝具_一、丑一剋采女奏_レ時…次改御衣…

寅一剋還_レ宮、出_三中和門_一間、(左次将に名を問われて大忌王卿・侍従ら名のる)…御_三南殿_一後(臣下たちの名掲)…

『有明の別れ』では、天皇が、南殿から夜の神事のために行幸し、神嘉殿の南階に御輿を寄せて、神事を行い、終えて、また同様に還御したであろう、そのあたりを描いたことになる。

Dに、「帰らせたまふほどはいみじく更けぬれど」とあるが、実際に、戌の刻に南殿に立つて出発し、寅の一刻も経過して、南殿に還御する。こういう天皇の神事について、一般の女性が知りうることはあるまい。そもそも女のための物語に何故この中院の神事行幸の場が選ばれたのであろうか。

先のAに『とりかへばや物語』の中院行幸の場面があった。そこには、小忌衣で参上した女君「権中納言」や「宰相中将」の姿が、女性達にどのように映ったかを記したにすぎない。

歌のなかで、帝は「光なき階のみぎり」と、右大将の不在を歌う。「階」とあるのは、行事からは南殿(紫宸殿)か神嘉殿のそれを指そう。だが、和歌では紫宸殿の御階を詠むことが多い。大将や近衛次将経験者の例が目立ち、また、内侍の例もある。定家にも、

「みはし」を詠んだ歌がみえる（『拾遺愚草』四〇九、二二八〇、二四六一など）。なお、返歌の「みぎは」には「右」が掛かる。こういう折に、右大将として供奉したことを、「見し夜の月」と帝の歌は偲んでいるのである。ただし、賀茂の行幸の折ではなく、描かれない中院の行幸の折と思われる。

この物語では、「女君」の対となる「男君」は天皇という立場性もあつてか、帝と近衛大将という対で描かれる。「いみじく更けぬれど」と、帝の歌が届けられた時に言及する。新嘗祭の中院行幸の時刻などを知らないと思えない所であろう。

この神事の行幸のときにも、女性で供奉するのが、内侍や女蔵人であつたという点を指摘しておきたい（室内における天皇と神の共食の事などに采女たちが関わるか）。

その年の暮れ、男皇子が誕生。七夜も過ぎる頃に、立後の宣言が下り、「大饗の儀式」など、限らない素晴らしさで行われたと記すが、詳しい儀式次第はない。立後の大饗は、作者が読んだ『栄花物語』に、臣下に拝礼を受ける様子を一家の慶事として詳しく何度も記すのだが、『有明の別れ』において女性の盛儀を描く興味はなさそうである。

翌年正月二日、物語第五年に入るが、その皇子御産の中宮邸に行幸がある。

「行幸」という儀式自体は、平安の物語や日記等で時折描かれるものではあるが、それが皇子出産に伴うものとなると数はやはり少ない。確認できたところでは、『紫式部日記』の一条天皇行幸（『栄花物語』初花にも引用される）、『狭衣物語』巻四における藤壺女御出産後の狭衣帝行幸、『栄花物語』巻三十九「布引の滝」での白河

天皇行幸の三例だった。『狭衣物語』を見ると、儀式や作法に関する記述はほとんどなされず、『栄花物語』では、深く愛され、中宮に立ち、その上に皇子も産んだと三拍子揃った賢子の幸いを行幸にことよせ祝い、寵愛なみなみならず、行幸の帝とともに内裏に還御したとある。『有明の別れ』でも、中宮がまもなく内裏にもどり、誕生した皇子は立太子する。

『紫式部日記』（以下『日記』と略す）だが、これは儀式の手順から女房の装いまで事細かな記述がされている。『有明の別れ』と比較すると、かなりの共通部分が浮き上がってくる。『有明の別れ』Eと、『日記』オとを比較したい。

E 正月二日、中宮に行幸あり。おほかたの空のけしきさへ思ふことなく、その色ふしなき賤の住みかだに、おのがさまさま千歳を祝ふ松のみどりに、まして玉の台いかばかりかはあらん。御前の池に、龍頭鶴首のいけるすがたをあらはしいでて、さまざまとのへられたる衆の声にも、さるは御耳とどまるべし。御興入らせたまふほど、ところせくおひのしる大将の前駆の声にも、まづふと思し出でらる。

年へにし御笠の山をさしはなれ秋の都の月ぞかひなき

とぞ、御心のうちにはおぼさるれど、などてかさしも（底本「さしもも）あらん。

三位中将、紅梅の浮紋の下襲、裾いとながくひきて、しりの御箱、御佩刀など、内侍にとりつたへたまふ。御興のいとせばき柱のうちをとほるとて、胡籥の弭のこそそとなる音なひまで、昔をおぼしいづる御心には、いとものなれ、あらはなる御面影のみぞおぼし出でらるる。弁の内侍、少将内侍、も

とよりかたちありといはるる、限りなく化粧したる、さる晴れに出でて、いとをかしげに見ゆるを、…はるかに御覧じいだす御目には、つきせず恥づかしようぞ思し知らるる。

上は、いつしか見つけきこえさせたまふより、めづらしげなき御胸のみさわぎて、ただおなじさまの浅香の沼にたちいでさせたまふほど、いとわりなくおほさるれど、若宮のゆゆしきまでおはしますを、いつしかうつくしみたてまつらせたまふ。……

宮司、殿のうちの人々、あるかぎり加階し、母宮も二品の御位にさだまらせたまふ宣言あり。今宮の御よろこびに、氏の上達部つらねて拝したてまつりたまふ。

オその日、あたらしく造られたる船ども、さしよせさせて御覧ず。龍頭鶴首の生けるかたち思ひやられて、あきやかにうるはし。……

鼓の音を聞きつけていそぎ参る、さまあしき。御輿迎へたてまつる船衆いとおもしろし。寄するを見れば、……

御帳の西おもてに御座をしつらひて、南の廂の東の間に、御椅子を立てたる、それより一間へだてて、東にあたるきはに、北南のつまに御簾をかけへだてて女房のあたる、南の柱もとより、簾を少しひきあげて、内侍二人出づ。その日の髪上げ、うるはしき姿、唐絵ををかしげにかきたるやうなり。左衛門の内侍御佩刀とる。…弁の内侍はしるしの御宮。…

近衛司、いとつきづきしき姿して、御輿のことどもおこな

ふ、いときらきらし。頭の中將、御佩刀など執りて内侍につたふ。……

殿、若宮いだきたてまつりたまひて、御前にゐてたてまつりたまふ。上いだきうつしたてまつらせたまふほど、いささか泣かせたまふ。御声いとわかし。

宮司、殿の家司のさるべきかぎり加階す。頭の弁して案内は奏せさせたまふめり。

あたらしき宮の御よろこびに、氏の上達部ひきつれて拝したてまつりたまふ。

(新潮日本古典集成『紫式部日記 紫式部集』四〇頁)

『日記』は、中宮付き紫式部が記しただけあつて正確かつ詳細である。もつぱら御簾の内側から記されている。『有明の別れ』の作者も『日記』を熟読していたものか、左大臣邸行幸の場面では『日記』の一条天皇行幸の記事と酷似した表現が実に六ヶ所(①～⑥)において見られる。

ところで、『有明の別れ』には、『日記』には記されない、独自表現が見える。傍線部なのだが、行幸の到着を、『日記』では鼓の音と船衆で知るが、『有明』では、大將の前駆の声を写し出す。いわば、女房の耳と大將体験者の耳との相違である。もう一点が、Eの傍線部で、「御輿のいとせばき柱のうちをとほるとて、胡籥の弭のこそそとなる音なひまで、昔をおぼしいづる」とある箇所。これは、近衛中將による御輿内の劍璽を運び出すことと関係する。

詳しく記された『猪隈関白記』建仁元年(一一二〇一)正月二十三日の朝覲行幸から見ていきたい。劍璽は、天皇の移動に必ず付き従うが、出発の際には、御輿が着いてから、近衛次將が内侍から手渡

された「璽」を運び、輿内に運び前方に置く。天皇が輿に乗る。さらに同様に「劍」が運ばれる。御輿から下りるときにはどう記されているのか。

力殿下候_レ御輿頭_二給、余右大將居也、次將等同_レ之、中納言中将脱_レ靴垂_レ裾置_レ弓開_二御輿戸_一、取_二璽筥_一前行、次天皇下御、殿下令_レ取_二御尻_一給、次左宰相中将公経卿取_二御劍_一候、御後、入_二御々休所_一、両中将就_二簾下_一付_二璽劍於内侍_一、……

右の時には、中納言中将が、靴を脱ぎ、下襲の裾を垂らし、手にしていた弓を置き、御輿の戸を開いて、まず、璽筥をとり出す。そのあと、天皇が御輿より降りる。その後、左宰相中将が劍をとる。璽をもつ近衛次將↓天皇（関白が帝の下襲の裾を持つ）↓劍をもつ近衛次將の順で進む。天皇が入御し、近衛次將は、御簾のもとで二人の内侍に璽と劍とを手渡す。

『有明の別れ』では、三位中将が御輿に入った際、背負った胡籙が柱にこすれて「こそこそと」鳴るといふ部分がある。ここを古典新書では、「帝の御輿が、非常にせまい柱の内を通り過ぎる時に、お側に付き従う右大將が背にしている胡籙の、矢に取りつけた弭の水晶玉が、こそこそと音を立てる―その音ないまで、…」と現代語訳されるが、この「柱」とは、文脈からは、御輿の柱を指すと思われる。御輿の屋根を支える四本の柱を「柱」と称したことは確認される。これは、『猪隈関白記』に従えば、璽筥を取りに入ったときに、帝の耳に入る音なのである。弓は置いても胡籙は着けたままであるからだ。帝の身体感覚を通して、かつて近衛中将時代（璽のことに奉仕するのが中将なので、このように解した。ただし、大將が

内宴・臨時の乗輿に、劍璽に関わることもあるという。）に女君がしていた動作を思い起こしている。これは、相当に特殊な記述と言つてよい。

「御輿の柱に武具がこすれる音」などというものは、一般貴族男性も、まして女房など、耳にする機会はめったにあるまい。音自体は小さく、些細な記述に見えるが、それだからこそ、じかに聞いたのでなければ、普通は記そうとさえ思わない事柄ではないだろうか。聞ける人物としては、帝、近衛次將経験者、それから幼帝の折に同輿する母后、もしくは幼帝付き上臈女房（乳母や典侍といった人たち）など、その数は限られていよう。

ところで、内侍の受け取り波線②③について、『日記』では、劍（御佩刀）↓璽（しるしの御筥）の順で示すが、『有明の別れ』では、璽（しるしの御筥）↓劍（御佩刀）とある。これは両方が正しい。『日記』が本来のかたちであり、『有明の別れ』が、限られた年代の事例であることが『禁秘抄』により知られる。寿永の頃、源平争乱により、「劍」は壇の浦海中に沈み、後鳥羽天皇践祚以来二十数年間、「劍」は昼の御座の劍で代用した。だから、劍璽の移動の際には璽を先に立てたという。承元の順徳天皇践祚の時からもとにもどった。『玉葉』文治六年正月二十七日の朝覲行幸においても、璽↓劍の順序であった。この『有明の別れ』の記述からも、金光氏の文治・建久の成立説は首肯される。

この場面での中宮（女君）は、内侍が晴れの場で姿を露出させているのを、わが男装時代を顧みて「恥づかしうぞおぼし知らるる」とあったと記す。行事の一コマから、帝と中宮各様の思いを描いている。

同様な様相を呈するのが、続く二月十七日の「花の宴」である。この場面が始まる前に、「なにごとの折々につけても、花のほひ、月の光も消たるる御有様の、げに九重の霞ふかきに、御簾の外のひきかへたるはえなさは、いみじくくちをしき」とあるように、故右大将はこういう折に美しい姿を現したのであるが、現在は不在、実際は宮中の御簾のうち深く、上の御局で眺める。詩作の場では、目の前の右大将を通して、帝は過去の女大将を思い出し、管絃の遊びになると、こんどは左右の大臣が「雲居」に響きわたった故右大将の笛の音を思い、涙する¹⁷⁾。

人々の退出の後、帝は中宮に琴の演奏をすすめる。中宮の女性としての姿が印象深く記された後、巻二は十五年ほどを一気に進め¹⁸⁾。その間に、中宮は第二子を生む。故右大将の忘れ形見の姫君は、中宮腹の第一皇子春宮に入内し、もう一人の子は内大臣になる。帝はやがて讓位し、中宮（＝女君）は女院となる。二人の間の子は天皇と春宮に立ち、そして女右大将の忘れ形見が、「一の上」左大臣になるまでを一気に描く。

四

巻二に入ると、年中行事は減少し、描かれても全く別の様相を帯びる。物語を展開させていくのは、第二世代の左大臣である。叔母と信じる女院を心ひそかに慕い、いくつかの恋模様を描かれていく。

行事は、内裏ではなく、おもに左大臣の動きにより、院・女院方において描かれるのが特徴的である。

物語第二十年、女院が病と聞いて参上した左大臣に、院は内裏の様子を聞く。答える左大臣に、院は、

・「過ぎぬる積奠にはたれたれか参りたりける。昔のこの忘れぬまに、よしなきことを聞こえてさいなまるるぞや」
(二四四頁／三七五頁)

・「くづほれたる古博士どもななり。いかにことなることなかりけん。詩つくりは、まづ容貌のをかしげなるがよきなり」
(二四六頁／三七六頁)

・「内覧の詩なども置きに出でたる顔の、ことのほかに見まうきは、いみじきこともくちをしうこそあれ。あはれ、をかしからん女に詩を作らせて見ばや」
(二四六頁／三七六頁)

と感想を洩らす。傍らにいる女院を意識して、点線のように、「梅花の宴」などを回想し、女右大将の詩作の素晴らしさ、詩を置くときの美しい顔、それらが失われていることを、現在の「積奠」から確認しているのである。

次の例も、左大臣が、「なにがしの定め」(名をぼかした政務決定の会議)のために、昨日不参であったことを詫言ひれば、今度は、女院がそのことに関して、「言おほからぬものから、その詮とあるべき節々尋ねめさせたまふを」と、若い甥に教えこむ。女として生きながら、かつての男時代に政治向きのごとに通底していた面が、今女院として生かしていることが描かれる。

右に続いて、左右に分かれての「虫合」がある。これは物語中、女院が主催した唯一の行事である。院・女院の前に、若い殿上人・公卿という男性陣が方人に分かれ、女院付き女房との御簾の外で、晴れやかな応酬があり、終れば管絃の遊びがある。

院は、かやうなるにつけても、例の古事おぼし忘るる世なし。あはれに恋しくおぼさるるままに、御笛召しよせて、音のかぎ

り吹きたてさせたまへるに、かの昔の春思し出でられて、暗きまぎれ、いともの悲しくあはれとどむべくもおぼされねば、中納言の君のつかうまつる琴をひき寄せて、ほのかに掻きならさせたまふ御爪音さらに似るものなきが、…

(二七四頁／三八四頁)

ここに恋しく思い出されるのは、女大將が奇瑞をおこした梅花の宴であった。院は思い出から笛を吹き出し、女院は琴を弾き出す。その音色を聞く周囲の者を心まどわせるほどに感動させ、左大臣の恋情はかきたてられる。そして、院・女院が女大將時代を思いだすのみならず、筆先は、一行が故右大將の里第に向かい、父である太政大臣の、「むかしのことあはれにおぼし出でつるほど過ぐしがたくて」と女右大將のありし日をまさぐる姿にまで向かう。

さて、物語第二十二年、

一日の院の拝礼、やがて女院の拝礼うち続き、大殿、関白殿へまぬりありきたまふ。拝礼がましきに腰も痛かりぬべし。また小朝拜、節会など、夜に在るまでありて、二日、関白殿の臨時客、二宮の大饗、三日、朝覲の行幸、さまさまひまなき公けごと、…五日は叙位の儀にみな参りたまへるに…

(三五〇頁／四〇七頁)

左大臣の行動が記される。行事名は記されるものそこに活躍する姿はない。忙しい間にも、四日の日に四条の上のもとに訪れる左大臣の恋を記したにすぎない。ただ、こういう描き方には、院、女院、太政大臣、天皇、中宮、春宮と、女院一族の繁栄を晴れがましく書こうとする意図はうかがえる。

物語は卷三に進む。卷三には、我が子を初めてそれと認識した

り、第二世代が自分の出生の秘密を知る物語となっている。卷一からの絡みあう人物たちを描くときに、やはり物語第二十二年、御禊・賀茂の祭の栄えなき、五月五日の騎射の見物、中宮の実父の死に「神わざなどしげく、伊勢の例幣のほどなど」と行事が触れられる程度にすぎない。

物語第二十二年、院の「四十の賀」が特筆され、帝の行幸、春宮の行啓がある。女院の血を受け継いだ春宮が笛を吹き、人々を感動させる、

女院は錦の帳にいつかれおはします御心地すずろはしく、ただいま袖うち返し、たち出でぬべくぞおぼさるる。

(四三六頁／四三三頁)

とまだ男性時代が思われ飛び出した衝動に駆られる。女院が琵琶を奏でると、またしても奇瑞がおこる。七人の天女が舞い下り、女院が天女の生まれかわりと明かされた。

物語最後の行事が、太政大臣の病に、嵯峨への行幸啓が記されるところである。ここには『栄花物語』鶴の林巻に描かれた、死を目前にした道長を見舞いに、娘の后たちの行啓、孫たちの行幸啓によるごぶ場面の影響が指摘されている(注3論文)。物語は、女院とその男装により築かれたこの一家の栄華を記して閉じようとする。

五

『有明の別れ』の年中行事が描き出したものについて述べた。いづれも女主人公の男性的資質の賛美―詩作、笛をかなでること―によることは一貫していた。そして周囲を圧倒する美しさ。それらが、女姿に戻っても、回想され皆にその喪失感が共有された。

『とりかへばや物語』では、きょうだいは入れ替わってしまった。女大將の男としての過去の歴史は、すべて今大將に上書きされてしまう。正月節会や花の宴で披露した晴れ姿もまた、結局は今大將と認識され、女大將のものではなくなってしまう。女大將についての人々の記憶は、現実存在する今大將のそれと統合されているのである。

対して『有明の別れ』は、女右大將は表向きには死去しており、その立場を担う者がすぐに現れることはなかった。家の跡継ぎである若君はまだ幼く、女大將の実際の息子で真の後継者である第二皇子（東宮）が生まれるのは、死去公表から二年余り経過してからである。彼女の「右大將」という官職でさえ、後任の右衛門督が就任するまで一年二ヶ月間も空席状態だった。そのためか、様々な行事の場面では何度も女大將のことが懐古され、周囲の者たちの心に「彼の存在が焼き付いていることがわかる。これは物語三年目に賀茂行幸供奉に女大將が願ったこと、それが現実になっただけで、『とりかへばや物語』とは対照的である。『有明の別れ』では、女主人公の男性時代の美質が、人々の記憶にしっかりと刻まれている。それは、年中行事を描くことで成し遂げられているのである。

そのときに、男君にあたる人物が帝であるということもあって、すべて女君についての男装時代の記憶は、帝に近任していた人物として、帝の身体感覚を通して、より鮮烈に刻印されていた。他のどの男性よりも勝れた人として、十数年を経てもまだ思い出として焼きついている。

物語における年中行事の意義は以上のようなようである。

ところで、第二節と第三節では、行幸の折の、紫宸殿の階の下、

左近の桜側から右近の橘側に移動する、美しく印象的ではあるが、ささやかな動き、また、御輿の中で、胡籙の矢はずの音がするといった、天皇の視線や聴覚などを通して描き方に注目した。

幼い帝が御輿に乗るときは、母后や、乳母や典侍など上臈女房が同輿している。そういう女性の感覚が反映していることを思うと、行幸を描くときの、内侍のような視線と見えあわせ、作者は、内侍を体験した典侍的な人物なのであろうか。

もとより、体験しなければ書けないということはないが、たとえば『讚岐典侍日記』の作者である典侍長子が、日記も終り近く、鳥羽天皇大嘗会の清暑堂御神楽を、「内侍所の神楽」に違う所がないと、場面性を詳しく記し、かつ、そこに幼帝の未長い繁栄と撰閲家の存続を言祝ぎ閉じたように、作者の位相と関係すると思われる。何か作者自身を主張しているように読みとれるからである。

さらには、関白家の臨時客や、勅使さらに淵酔の折の饗応など、男性ならその日記に記すが、物語としては異質なそれらを統合すると、撰閲家にも自由に出入りできるような、内裏と中宮との兼官を体験した女房のような視線と思われる。

記録その他の資料にも恵まれている時代なので、今後、さらに検討を進めていきたい。

【注】

1 このあたりの本物語の特性とも言うべき、女性同士の親密さという機微について、宮崎裕子氏「女たちの世界——『有明の別れ』が描いたへ女性同士の夫婦——」（『中世物語の新研究——物語の変容を考える——』新典社、二〇〇七年）に指摘

がある。「男女の結びつきよりも、女性同士の親しみ合いに重きを置く女主人公を誕生させた」という点で新しい境地を拓いたもので、『我が身にたどる姫君』の爛熟にと受け継がれるという。

- 2 中村忠行氏『有明の別れ』上解題（古典文庫、昭和三三年五月）、大槻修氏「物語の奇想と頽廃美——在明の別ととりかへばや——」（『論集日本文学・日本語2』角川書店、昭和五二年）、米田明美氏「『有明の別れ』と「とりかへばや」」（大槻修氏注『全対訳日本古典新書 有明の別れ』（創英社、一九七九年）、本田環氏「『有明の別れ』の研究」（『国語国文学研究』35号 二〇〇〇年二月）などに言及される。
- 3 『栄花物語』の記事を『有明の別れ』の場面に生かしているという指摘は、金光桂子氏「『有明の別れ』と九条家」（『国語国文』二〇〇八年三月）でなされている。
- 4 金光桂子氏「『有明の別れ』と文治・建久期和歌——定家ならびに九条家歌壇との関係について——」（『文学史研究』46 二〇〇六年三月）において展開された。
- 5 谷知子氏『中世和歌とその時代』（笠間書院、二〇〇四年）第一章第二節「文治六年任子入内屏風と和歌」。
- 6 本文引用は、大槻修氏注『全対訳 日本古典新書 有明の別れ』（創英社、一九七九年初版、一九九五年三版）によるが、表記を変えた箇所がある。また、絶版のために頁数の下に『鎌倉時代物語集成』第一巻の頁数をも付した。
- 7 臨時客については、川本重雄氏「正月大饗と臨時客」（『日本歴史』473 一九八七年一〇月）を主に参考とした。
- 8 實際例を『中右記』（増補史料大成）天永三年（一一二二）正月二日から見ていく。東の対で行われていることが明らかで、『有明の別れ』を読む際に参考となる。
漢天高晴、扶桑甚明、今日有臨時客、予先已時許參太
后御所枇杷殿西御方、次參東三條、申時許、右大將、
以下大納言四人、中納言八人、參議五人、大貳出仕、人々
皆參、於東對南面有臨時客、上達部以下入從東
中門、列立對南面庭前、殿下令立對未申程給、殿
上人頭中將通季頭辨實行以下藏人有業列其後、二拜了
殿下頗令揖讓給、右大將被歩進後、殿下猶從南階
令昇給、少將宗能朝臣取御沓、右大將以下大納言
□昇從同南階、〈子族前駟各取沓〉、中納言參議昇
從中門廊、各相分着座、次居主人饌、〈仲實朝臣爲
陪膳〉、五位三人取高器居之、一獻、〈家主令取
給、惟信朝臣進盃〉、二獻、頭中將、通季勸盃、〈藏人
左衛門尉有業瓶子〉、居飯汁、〈海雲汁〉、次三獻新宰
相中將實隆、〈瓶子資信〉、次居汁物、〈雉羹〉、依御
氣色予執拍子出歌、〈安名尊一返、席田二返〉、
次朗詠令月德是北辰之句一兩度、四獻別當能俊卿、
九条兼実の日記『玉葉』を見ると、彼が閑白になってからは、
臨時客が文治三年と建久六年に行われているが、その際には、
文脈から寝殿にて行われていることがわかる。
- 9 注8に示した『中右記』や『玉葉』文治四年条にも確認され
る。
- 10 「たをたをと」の表現は、『とりかへばや物語』でも女性性を
- 11

12

表し、『源氏物語』には女性にしか使われない。『有明の別れ』にも大きく影響を与えた『狭衣物語』古活字本には、男性ながら狭衣の衣装に用いられており、狭衣の女性的な造型とともに注目したいところである。寅の日でも、「豊のあかり」とある例として、『四条宮下野集』がある。

五節のなかの夜、月のあかきに、局に人々あまた来て、所もなく居て物語などするに、為仲、所のなければ土に立ちたり、鎮魂の祭に、内侍の出でたまふ待つとてあるほどに、ゐたる人にさしよりていふ

月こそとよのあかりなりけれ(二一〇)

詞書の「鎮魂の祭」は寅日に行われるもの。他にも寅日の「とよのあかり」歌が見え、「豊のあかり」が辰の日の節会のみでなく、卯の日の新嘗祭をも指すとしてよいと思われる。

『有明の別れ』では帝自身の歌なので「階」とあるが、こういう歌を詠みこむのは、女性なら、「内侍」が感覚的に体験しているものなのである。『風雅和歌集』に、「宝治百首歌に、冬月」の題で、「深草院少将内侍」が詠んだ、

雲のうへのとよのあかりにたちいでて御はしのめしに月を
みしかな(八八一)

がある。宝治百首には題「豊明節会」とある。「御はしのめし」とは、「御階の召。節会の開始に当り、内侍が紫宸殿の東階上に臨んで、承明門外に待期する諸臣をさしまねき、召し入れる事」であり、「内侍の晴の任務である」と説明がなされる(岩佐美代子氏『風雅和歌集全注釈』笠間書院、平成七年)。同書

14

では、また、少将内侍の姉である弁内侍の日記に、やはり豊明の節会の折の歌「雪の下の梅の匂ひも袖さえて進む御階に月を見しかな」を紹介する。

金光桂子氏「『有明の別』の〈有明の別〉——題号の意味するところ——」(『文学史研究』47 二〇〇七年三月)は、題号に込められた意味を和歌史的に明らかにし、また、男装の喪失感を長く引き延ばす意味があつたと捉える好論である。ただし、中院の行幸の折の「見し夜の月」が、賀茂行幸の姿を偲んだという指摘には、日中に立立し、女大將は途中で帰ったので従えない。描かれてはいないが、帝は、ありし日の中院行幸を思い出して歌を詠んだものと解しうる。

15

『延喜式』「内匠」に、御輿の大きさの説明に「長一丈四尺、広三尺一寸、柱高四尺八寸」と見え、『輿車図考附図』「妙心寺所伝輿図」(『古事類苑』による)に、「箱前ノ柱ヨリ後柱マデ四尺六寸」のような説明があつて、「柱」と称したのは明らか。

16

佐藤厚子『中世国家儀式——『建武年中行事』の世界——』(岩田書院、二〇〇三年)第一章を参照した。

17

これらの女右大將の不在を嘆くという物語化の根底には、九条兼実の長男良通(内大臣右大將)の急逝、そして娘任子の入内という出来事が重ね合わされている、という金光氏の説得力ある論がなされている(注3論文)。

18

荒が作成した年立に依拠した。古典文庫の年立に、さらに読みを加えたものだが、紙幅の都合で割愛せざるをえなかった。

19

『たまきはる』は建春門院に仕えた中納言(俊成女)の作であ

るが、「序」にあたるところで、女院について、「大方の世の政事をはじめ、はかなきほどの事まで、御心にまかせぬ事なしと、人も思ひ言ふめりき。まことには、おはしまさでのちの世の中を思ひ合はするにも、かしこかりける御心一つに、なべての世も静かなりけるを…」とあり、政治向きのことも、他の様々なことも知悉しているとあり、女院像の一つの理想型なのであろう。

